隣の子

本上　ひろと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隣の子

【Ｎコード】
Ｎ３３３９Ａ

【作者名】
本上　ひろと

【あらすじ】
愛する彼女を失った青年が打ち明ける、彼女との新しい関係を描いた、短編小説。

僕の一番の親友である君に、このことを話したことはなかったかな。

彼女は同じ年で、笑顔がとても幼かった。そのことをよくからかったものだ。彼女はいつも僕の隣にいて、無邪気に僕を見つめるのだった。僕らはとても順調だった。お互いに幸せを感じることができたし、この幸せはずっと続くものだと思っていたものだった。彼女と離れてしまったことを、僕はとても後悔したし、そのことで、追い詰められたりもした。僕はやばかったんだ。だから僕は、彼女と新しい関係を持った。

今は離れて暮らす彼女は、僕の心の中ですぐに現れる。そして相変わらず、僕の隣にいて、じゃれてくる。目を閉じれば、いつでも彼女の声を聞くことが出来たし、横を見れば、僕の隣で僕にいたずらをしようと企んでいる、笑みのこもった彼女の目を見ることが出来た。僕の頭がおかしいって、きっと君はそんなことを考えたんじゃないかな。たとえ君が僕の親友じゃなかったとしてもだ。

僕に見える彼女や、僕に聞こえる彼女の声はイメージなんかじゃない。そんなのは、アイドルオタクのやることだ。僕のは、そんなもんじゃない。彼女と会うとき、いつも心が満たされる。昔、彼女といた頃には感じなかった、新鮮な気持ちだ。テレビで米国映画のコマーシャルを見たとき、僕は彼女を誘ってみた。「私も観たかったの。また一番大きなポップコーンを買おうね。」彼女は幼い笑顔で答えた。

僕らはとても順調だった。そう、ある意味ではね。当たり前じゃないか、と君は思うかい。でもそれは君が、全てが僕の思い通りにいくと考えてるからじゃないかな。それは、イメージなんかじゃないんだ。時には意見がぶつかって喧嘩することだってある。でも喧嘩って、付き合ってれば当たり前のこと。次の日には、僕らはいつ

もの僕らに戻っていた。僕が君に、「今彼女はいない。」といえば、君はそう思っただろうし、もし「彼女がいる。」と言ったとしても、君は僕を疑うことはしなかっただろう。僕は付き合っているフリをしていたのではなく、付き合っていたのだから。「いい加減、昔の女は忘れろよ。」周りの友人たちは決まって僕にこう言うんだ。「忘れる？今も隣にいるのに？」なんて言ったら、友人はどんな顔をするかな。僕だって、今の関係が続くとはおもっていない。ただ、これは必要なことなんだ。僕はおかしくなっちゃいそうなんだ。

　僕はよく、彼女を助手席に乗せて車を走らせるのを好んだ。僕が運転する隣で眠っている彼女を見ているのが好きだった。僕は彼女を起こさないように、ゆっくりとブレーキをかける。気がつくと目を開けてじっと僕を見ている。しかし、温もりの残っているうちに、彼女はまた眠りに落ちる。僕は手を伸ばして後ろの席から上着をとり、彼女にかける。

　この話が、現実のことか、僕の頭の中のことか、君は判断しようとするだろうね。君は少し考えて、ぼくにこう質問する。

「じゃあ新しい恋人ができたら、二股だな。」

僕はこう答える。

「まあ、最初はね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3339a/

隣の子

2010年12月14日18時03分発行